



衛生兵戦記

腰 山 巖

朝日新聞社

腰山 巖（こしやま いわお）

大正三年（一九一四）秋田県生れ。秋田県立能代中学校卒後上京、生田春月芸術研究会幹事。昭和十八年応召、同二十一年六月帰還。

鹿沼市野尻に土着、地方史研究。

著書「鹿沼助郷野尻騒動記」「安政野尻駅市記」「氷雲」など。

現住所』栃木県鹿沼市野尻六二八。

衛生兵戦記

定価 500 円
発行日 昭和 45 年 3 月 31 日
著者 腰山 巖
装幀 松本泰治
発行者 朝日新聞社 大田信男
印刷所 明善印刷
発行所 東京 名古屋 朝日新聞社
大塚 北九州

© 1970 腰山 巖

腰山君との出会いは、東満国境に近い東安省斐徳（ひとく）というところであった。ウラジオストクのすぐ北に源をもつウスリー河は、興凱湖（ハンカ湖）の近くから国境線となつて真北に流れ、虎頭、饒河をへてハバロフスクで黒龍江と合流するが、その興凱湖の水がそのまま周囲をひたして、あちらこちらに湿地帯をつくっている大草原を、西側から眺めることのできるなだらかな丘陵地帯の一部に、この斐徳があった。

昭和十六年七月、応召によつて軍医の卵となつたわたくしは、学校をでてからわずか二カ年ほどの臨床経験をもつて、独立自動車第三十二大隊第四中隊（高瀬隊）付となり、東京での部隊編成が終るとすぐに、部隊といふしよにこの地にきたのである。いわゆる関特演（関東軍特別演習）といわれた大召集の時のことである。

兵科の将校も軍医も、兵隊もほとんどのものが家庭もちで、東京付近の出身者が大部分であつた。ほかの召集部隊と同じように、きびしい軍律の中にも、なんとなく世間的なものがただよつていた。兵隊は「軍医殿」というよりも「軍医さん」という方が多かつたし、わたくし自身もこれに少しの抵抗も感じなかつた。

こんな部隊であつたから、病人の数は多かつた。ひと演習終つた部隊に帰つてくると、大隊の医務室は患者で一杯になつた。町の先生にみてもらうような気持でやつてくるものもいたし、診察する軍医の方にも、多分に開業医的などころがあつた。しかし、病気で亡くなるものはほとんどなく、われわれが間借りしていた現役部隊の

ように、患者数は少ないのに、重症のもの多かつたのと、全く対照的であった。

自動車運転免許をもった、車の数ほどの人達を中心に編成された輸送部隊であったから、早く一人前の操縦手になれるように、兵隊たちは一生懸命に訓練をつづけた。十月初めになると、冬將軍といわれるきびしい寒さがやってくる。そして、この頃からきままって部隊全員の演習が行われた。厚い毛皮の防寒具も、零下三〇度に近い寒さには到底歯が立たなかった。中隊長といっしょに、ジッと指揮官車に坐っていると、そのまま凍りついてしまうように感じられた。

兵隊は少しずつ気候風土にもなれ、次第にたくましくなっていくた。そして、二年ほどたって立派な輸送部隊となったころ、東京の留守部隊から初年兵が送られてきて、古参兵の一部と交代した。この中に腰山君がいたのである。衛生のことは何も知らない彼が、不本意ながらも医務室にやってくる、やがて優秀な衛生兵に成長していくたいきさは、この本の中に詳しい。

昭和十九年の春になって、急に部隊は移動することになった。十六年の暮れから始った大東亜戦争も、はなはなしい緒戦の興奮からさめ、次第に暗雲が濃くなってきていた。南方か、中国か、将校といっても、ただの軍医であるわれわれの仲間では、サッパリわからなかった。兵隊たちも、魚つり（この付近の川や沼では大きな鯉や鰻がたくさんつれた）や、雉とり（世界の三大狩り場といわれるほど、雉の大群が、開拓村の大豆畑に集っていた）で、たのしい思い出をもったこの土地を離れることは淋しかったようである。そして、貨物列車に自動車といっしょにつみ込まれ、一週間近くの長い旅をして、到着したところは南京であった。暗い有蓋貨車から出てきたわれわれの目の前に、キラキラ輝いている揚子江の洋々たる流れがあった。

荒涼たる満州の景色にくらべ、ここには、やわらかく美しい中支の風物があり、戦地だということをしばしば忘れるほどであった。東洋史や漢文でならった古い寺院や昔からの習慣が残っていて、歴史の厚みがどっしりと感じられた。しかし、九江の対岸に停泊中まざまざと見せつけられた空襲のものすごさと、漢口に到着間もなく出かけた輸送の帰途を皮切りに、その後いくたびとなくおそわれた空襲に、今さらのごとく戦争の苛酷なことを

身にしてみても味わった。

われわれの部隊は中支派遣軍に配属され、漢口で勢ぞろいして、いよいよ作戦に参加した。湘桂作戦といわれるもので、そのころすでに落ちていた長沙を通って、衡陽攻略のための彈藥輸送が主な任務であった。部隊はまず湖南省を南下して岳州にでた。ここでは洞庭湖畔に野営した。中国第一の湖であるだけに、その水のしぶきは琵琶湖の比ではなかった。それからさらに真南の長沙へ向ったが、その途中新牆や新市では、カーチス機に見舞われながらいくたびか三途の川を渡った。そこへ着けば、制空権はこちらのものだと思ひこんで、やっと到着した長沙では、朝から敵機におそわれた。このころから行動はすべて夕暮れから翌朝までに限られるようになった。部隊は長沙を出てさらに南下した。ちょうどその夜の爆撃は、今でもアリアリと思ひ出される。一晚中真赤にもえていたが、後できくとあの美しい町並みがほとんど廃虚に帰したということである。

待望の衡陽が落ちたころ、みんなの関心は、これから部隊はどちらへ向うだろうかということであった。すなわち、このまま粵漢鐵路ぞいに南下して広東に出るか、それとも西に折れて桂林方面へ行くかのどちらかであった。そして、すでにきまっていたことかもしれないが、さいころの目が後者に出たとき、われわれは、みんな最後の決心をした。これほど中国の奥地にやってきた以上、生きて帰ることはむずかしからうということであった。兵隊は過労と栄養不足と、赤痢・マラリア・回虫症などの病気になるやまされ、ますます消耗してゆく。薬品も底をつき、せんだんの樹皮が駆虫に用いられてよく効いた。コレラ患者の発生には、衛生教育の徹底と、軍紀厳正の重要さを感じられ、車両整備が人命に直接関係していることも知った。

広西省桂林は美しい町であった。南面で見えていた山川がそのままそこにあったし、国を出てからかつて見たことのない澄んだ川水を、ここへ来て初めてみた。ついでさらに南に下って、しばらく駐留していた荔浦（カキホ）の町は、思ひ出の多いところである。ここを中心にして、桂林からすでに南支に属する柳州への輸送が行われたし、また湘江を利用して水路輸送も行われた。どちらの輸送もときどき襲撃されてぎせいの者がでた。糧秣を集めに行った下士官以下数名が付近の山林でやられ、この弔合戦では、かえってこちらが負傷者を出して引きあげた。

このころ、中支派遣軍の一部が北支へ移動するとううわさをきいた。これは米軍本土上陸にそなえてということであった。そして、間もなくわたくしも、河村部隊から、部隊が所属していた第十一野戦輸送司令部へ転出したのである。東京を出てから四年の間、文字どおり生死を共にし、兄弟のように親しんできた部隊の人たちと別れることはまことに感無量のものがあつた。

それからの部隊のようすは、ときおり腰山君からの便りでできく程度であつた。負傷後入院していた腰山君の無二の戦友笹本君が、当時猖獗をきわめていた回帰熱で亡くなったこともきいた。そして、しきりと彼の誠実な人がらがしのばれてならなかつた。

あのときから、すでに二十五年。帰還した当時は、毎日思い出された満州や中国のできごと、今ではほとんど忘却のかなたに沈んでしまつた。

そんなところに、突如として腰山君の「衛生戦記」が持ちこまれたのである。息もつかずに読んでゆく。心のスクリーンの上には、それからそれへとあのころのできごとと風物が、走馬灯のように現れてくる。赤茶色のねっとりとした中国の田舎道に、深くほられた二筋の車輪のあとが見え、房子（民家）のにおいがし、傷ついた戦友のこえがきこえてくる。

戦は血汐の炎

もののふの病めば悲しむ

たまゆらの白き繻帯

にじみ染むいのちの色を

みつめつつ救いのひとみ

われに寄せ薬をもとむ

輸送からひどくつかれて帰ってきて、その日の状況報告が終ってから、腰山君はほのぐらい灯油の光のもとで、おそくまでこの戦記をつづっていた。そして、出来上がったものを、時おり医務室での団らんるとき読んでくれた。右の詩はそんなおりに披露され、わたくしの心にしみついたものの一つである。

この戦記の中の、主なたて米の一つになっているのは笹本君のことである。彼についての思い出は、帰国後も長くつづいていて、ぜひ一度ご遺族の方にお目にかかりたいものだと思願していたが、住んでいた大森蒲田付近はすっかり焼けてしまつて、手がかりがつかめずにいた。しかし、これも腰山君の例のねばりで、先日、やっと果すことができた。

この戦記が何ものにもまして、笹本君のご霊前へのお供えになることをうれしく思っている。

ただ、ところどころにてでくる秋山軍医の記事には、赤い顔をしながら、穴があつたらはいりたい気持で一杯である。このことを腰山君に話して、秋山でなくて春山にとでもかえてくれないかと話してみたが、これはノンフィクションで、その当時の気持をいつわるわけにはいきませんから、とキツパリ断られてしまった。

こんなわけで、この本は、笹本君をはじめ中国の地でなくなれた多くの戦友の霊への、せめてもの慰めとして、また、いわゆる戦記ものの中でも、ただの一衛生兵が、それゆえに戦地においては、たえず部隊の人達のいのちとじかにむすびつき、せきららな人の心とふれ合つた人間の記録として貴重なものであり、ユニークなものである。したがって、花やかさや、ドラマチックなところはあまりないが、大東亜戦争という大あらしの中で、互いに助け合い、はげまし合い、なぐさめ合つた兵隊たちの姿がマザマザと写し出されている。

終りに、このような形で出版していただいた朝日新聞出版局の方々の、あたたかいご配慮に対して心からお礼を申上げる次第である。

昭和四十四年十一月

目次

稲穂

11

雨

85

嵐
やまおろし

129

炎

193

俘虜

277

まえがき

秋山房雄

1

あとがき

腰山 巖

335

湘桂作戦

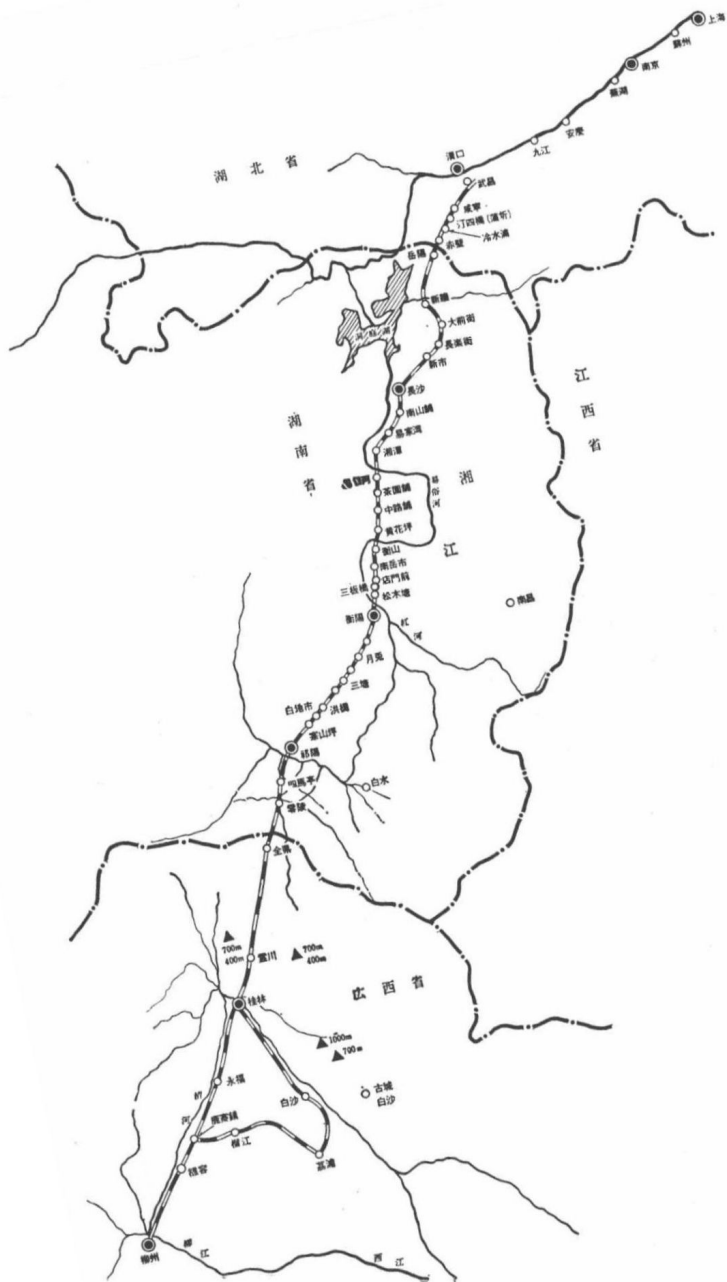
太平洋戦争も末期に近づいた昭和十九年（一九四四）春から、中国大陸を南北に縦貫して仏印に達する大作戦が行われた。

当時、シンガポールから東京への海路は、すでに危険でこれに頼れない形勢となっていた。それでこの南方根拠地と、東京の大本営とを陸路、鉄道でつなごうというのが、この大作戦の主なねらいであった。要するに、中国大陸に進出したアメリカ空軍基地を撃破して、日本本土への空襲を防止し、東シナ海における海上交通を確保すること、さらに太平洋戦局の緊迫につれて、南方の軍との陸上連絡を確保することが必要であったのである。

作戦は、華北（河南）に始まり、華中（湖南）、華南（広西）を経て、さらに貴州省、仏印、広東省に至る一五〇〇キロの大遠征で、横山勇中将を軍司令官とする第十一軍（呂軍）十二個師団がこれに動員され、総兵力五十一万が投入された。

この全般を「一号作戦」といい、そのうち華中、華南における作戦を「湘桂作戦」と呼んだ。

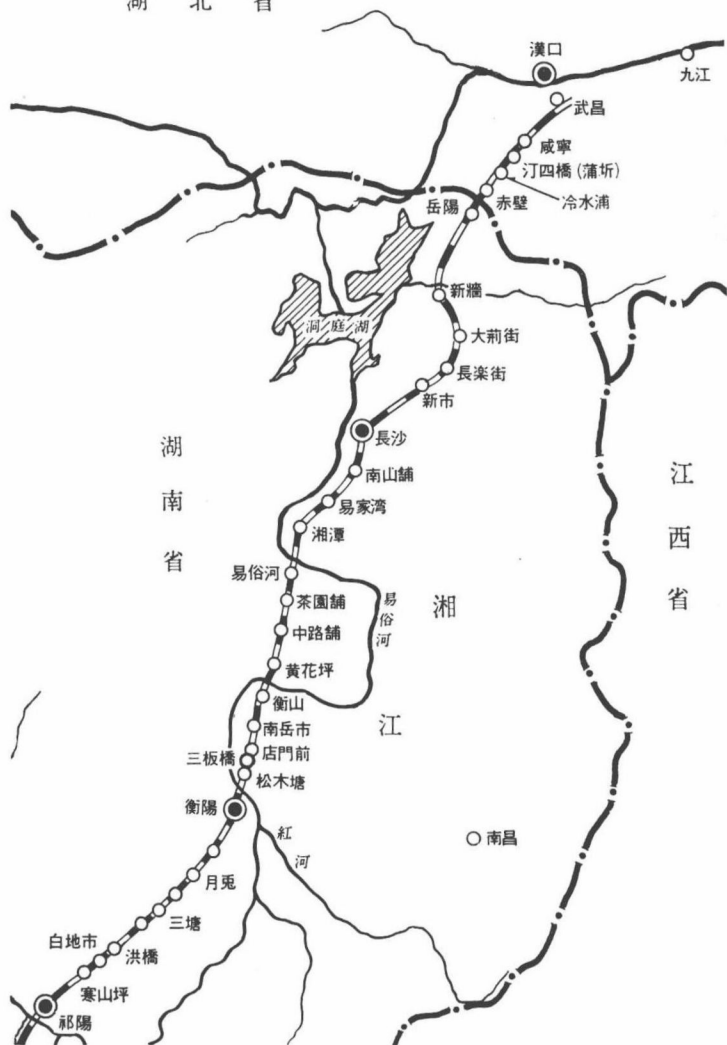
湖南省洞庭湖にそそぐ湘江に沿って一路南下。アメリカ空軍の制空権下という悪条件と苦闘しながら、広西省の省都、桂林の敵航空基地を潰滅させたりえ柳州も攻略。つづいて追撃戦を展開し、作戦期間は翌二十年春に及んだ。



稻

穗

湖北省



稻穂は遠雷に靡くけれど、刈る人民の姿がない。

房子が山の麓に招くけれども、還るべき親子がない。

沿道は桐樹の並木であるが、昼間は誰も歩かない。

そのあたりは地獄のように暗いほどよかった。

敵も味方も、夜になれば、自由に濶歩した。

そして、勇敢に戦った。

私達は、果てしない中華民国の奥地に向って、戦旅の途上にあつた。どこへ行っても、どこかにねぐらを持ち、そこからまた飯盒と装具と若干の食物とを積み、輸送命令にしたがつて、弾薬や衛生薬品をどっさり積載して移動した。

独立自動車第三十二大隊河村部隊は、四中隊に編成され満州国東安省裴徳から、呂軍に参加して長沙を通過し、いよいよ衡陽作戦に集結する各部隊の輸送に全力をあげる事になった。

南京・蕪湖にきて、はじめて戦場の傷跡を見てから、戦いの経験に乏しい私達の肌に、じわじわと油脂のように浸みわたり、中支にきたことをじっくりと意識しはじめたのは、揚子江を溯航する船底を出てからである。東安省の虎林・虎頭で、演習をしていた時とはちがう。

蒸し風呂のような船フナボネの中で、全身汗にまみれながら、歩兵部隊や挽馬部隊と漢口・武昌ハンカウ・ウシュを目指して護送されている時は、自分達がどういう任務を持っているのかわからないまま、シナ人の船長夫婦にこの国の流行歌を教わったり、故郷の妻子達に感傷めいた手紙などを書いていた。

ウオラ ト フオ ショア ニ ヨラ アイレン

オーラ アイレン ポオア プ シュアー

シエン チエン ツオー チエン

ト ウオ アイ シエン チエン

シエ チエ ウイ ウオア ポオア プ シュアー

チヨシ ニデ トシピン

トシピン トシピン ニホア ヨピレン

マイ ア マイ コーヤーコー

ウオリヤンガ トンイシン

どんな文句で綴られるのか、唄っている間に日本の三味線に似た小さな胡弓の、物哀しい音律の流れとともに、四十万円で買われてきたという、船長の妻のことなど、この国の風習を聞くことも、兵隊達の心の片隅を揺すぶった。(トン イ シン)という最後の言葉は「同一心」と書くのだということ、「我們」(ウオラ)、「儂的」(ニデ)、「我們兩個」(ウオラリヤンガ)、それから「愛人」(アイレン)と